

ブリトニー・スピアーズ 去勢執行④

Britney Spears - Pop Tart, Ball-Buster by Number 2



10 勝者決定

「二人、脱落ね」

ブリトニーは微笑みながら、去勢されて床に転がった二人と、次に蹴られる番を怯えながら待っている三人を見比べた。

「もうそろそろ回復したころよね。そろそろゲーム再開よ」

「デックスは最初から、去勢するつもりだったわ。ダリウスは私に恐ろしい暴言はいた。絶対に許されないことよ」

彼女は残る三人に説明を続けた。

「だからこの二人は特例。ゲームは最初からやり直しよ。あんたたちのうち、二人が」

彼女は、指でVサインを作って見せた。

「男じゃなくなっちゃう。がんばって最後まで立っていられた者だけが、無事に男でいられるってわけ。いい？ これは競争よ。玉が無事でいられるのはたった一人なのよ。わかった？」

言うなり、彼女はカルロスの睾丸にブーツの爪先を叩きつけた。

「ぎゃあああ！！！」

カルロスの絶叫に続いて、リッキーとデレクの悲鳴があがった。

「うろうろう！！！」

「ぐおおお！！！」

三人の男たちは歯を食いしばり、おそろしい苦痛に耐えて、脚をふんばっていた。

そんな彼らにブリトニーは平然と追い打ちをかけた。カルロスの股間に爪先蹴りと膝蹴り。リッキーは二発続けて膝蹴り。デレクは二発続けて爪先蹴り。

つづいて彼女は、カルロスの睾丸に三度、パンチを浴びせた。たてつづきのアップercutが三発、彼の睾丸を襲った。彼女は時間を無駄にすることなく、リッキーの股間に拳を三度たたき込む。同様にデレクの睾丸も三発、恐ろしい打撃を浴びた。

なるほど、彼女は公平だった。次は四発、次は五発と一回りする度に、男たちは同じ回数（つまり一発ずつ増えていく）を受けたのだ。えり好みや最負することもなく、公平に同じ数だけ順番に痛撃を食らっていたのだ。

機会均等。チャンスは平等に与えられる。アメリカ的公正さってやつだ。

恐ろしい激痛や去勢される恐怖と戦っている男たちの姿に、最初は戦慄していたデビッドだが、あまりに異常なシチュエーションに感覚が麻痺したのだろう。思わず、笑ってしまった。

「何がおかしいの？」

突然、ブリトニーがデビッドに顔を向けた。

「あ、いや……」

彼は狼狽した。

「つまりその……楽しんでるんです」

「ふうん、それは嬉しいわね」

彼女は、にやりと唇をゆがめた。

「立って、こっちに来て」

デビッドは言いつけに従った。ソファから腰を浮かし、彼女のほうに一歩歩み出た。

その瞬間、ブリトニーは全身の力をこめて、彼の睾丸を蹴り上げたのである。

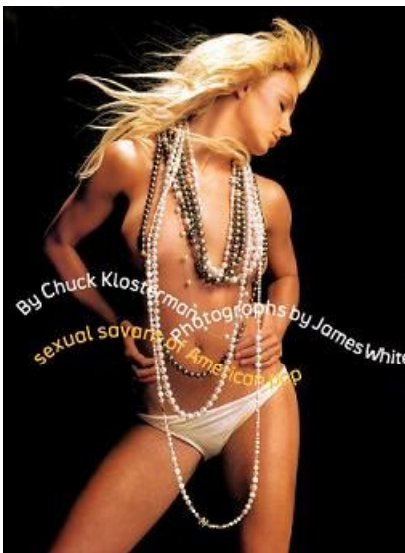
目が眩み、全身が硬直し、続いて激しい苦痛が下半身を覆い、嘔吐がこみあげた。

デビッドは床に膝をつき、右手を床に置いてくずおれそうな上半身を支え、左手は睾丸にあてがわれていた。

「結構好きでしょ、痛いのが」

ブリトニーが、涙を流しながら必死に苦痛に耐えるデビッドを見下ろして笑った。

生まれて初めて味わう苦しみだった。



信じられなかった。

たった一回蹴られただけで、これだけの苦痛に苛まれる。

あのダンサーたちは、数十発もの蹴りやパンチを受けて、まだ立っているのだ。

称賛すべき忍耐力だ！

ブリトニーは、デビッドを一瞥すると、カルロスの前に立った。彼女は新しいルールを思いついたようだ。両手でカルロスの睾丸を掴みこう言った。

「三十秒よ。数えて」

カルロスは、1、2、3……と数え始めた。ブリトニーが次第に睾丸を掴む両手に力を込めてゆくのが、彼女の腕の筋肉の盛り上がり方でわかった。

「15……16……17……18……19……20……21、22、23」

カルロスの表情が苦悶にゆがみ、数える口調が次第に早くなっていった。一刻も早く、恐ろしい苦痛から逃れたいのだろう。

「28、29、30！」

「だめ！ 早すぎ！」

ブリトニーは両手を離さず、金切り声をあげた。

「最初から！ 1から数え直し！」

「んなことないっすよお！ ちゃんと数えましたよお！」

カルロスは涙声で抗議した。

「みんな、どう思う？」

ブリトニーは女性ダンサーたちを振り返って意見を求めた。

「早すぎましたあ！」

女性たちは声を揃えて同意した。

「だつてさ」

ブリトニーは冷酷な微笑みを浮かべて、歯を食いしばって苦痛を堪えるカルロスを見た。

「ここでは私がルールブックよ。さ、最初から数えて！」

もう一度30まで数え直したカルロスの睾丸から彼女の両手が離れた瞬間、彼は一瞬膝を落とし書けながらも、なんとか踏みとどまった。

目が虚ろだった。全身が小刻みに痙攣していた。ダリウスやテックスのような目に会いたくないという恐怖だけが、彼を支えているに違いない。

同様に、デレクやリッキーも、カルロスのようにむぎむぎ数え直すはめに陥りたくはなかったのだろう。必要以上にゆっくりと30まで数えた。

「ちっ！」

リッキーの鞆丸から手を離れたブリトニーは、全身を大きく揺れ動かしながらも、まだ両足で立っている三人を眺め回して舌打ちした。

「なんで誰も倒れないのよ！」

彼女は苛立ち、キャンデーを取り上げられた幼児のように叫んだ。

「何か道具を使ったら？」

アジア系の女性ダンサー、ポーラがアドバイスした。

「どんな道具よ？」

ブリトニーが聞き返した。

ポーラは部屋を見回し、ベッドから飛び下りると、暖炉のそばに置いた火掻き棒を取り上げた。「これなんか、いいんじゃない？」

長さは60センチくらいの鉄製で、先端に10センチくらいの幅のシャベルがついている。

「完璧じゃん！！！」

ブリトニーは躍り上がって手を叩き、ポーラから火掻き棒を受け取った。

確かに完璧な道具だった。

ブリトニーはゴルフクラブを振る要領で、勢いをつけて火掻き棒をカルロスの鞆丸に叩きつけた。

カルロスの体が、1メートルばかり空中に跳ね上がり、この世のものとは思えない絶叫が部屋中に鳴り響いた。

そして、彼の体が再び床に着地したとき、彼の膝が落ち、そのままぱたりと腹這いに倒れた。

床に突っ伏した後も、彼の体はヒクヒクと激しく痙攣した。

「やったあ！！！！！」

ブリトニーは火掻き棒を宙に放り投げ、両手を大きく突き上げて叫んだ。

「ポーラ！ あんたのおかげよ！！！」

次はリッキーの番だった。

彼は青ざめつつも、目をかっと見開いて、待ち構えていた。

カルロスは負けた。ここで我慢して、続いてデレクが倒れば、彼は勝者になり、恐ろしい責め苦を終えることができるのだ。

ブリトニーはしばし火掻き棒を床につけたまま、じっと彼の腫れ上がった陰囊を見つめ、それ

から棒を振り上げた。

火掻き棒の先端のシャベルが、リッキキーの股間に叩きつけられた。

幸運なことに、狙いはやや外れ、内腿に当たった。それでも彼の体は宙に跳ね上がったが、着地したのは膝ではなく足裏だった。そして彼は、生涯でいちばんの忍耐力を發揮し、倒れなかったのだ。

数秒ほど、彼の体は左右に揺れた。だが、彼は踏みとどまった。

「やるじゃない」

ブリトニーは感心したように言った。

いよいよ最後、デレクの番となった。

ブリトニーが火掻き棒を振り上げたとき、恐怖に包まれた彼の顔が奇妙にゆがみ、ヒステリックに笑いだした。

彼の股間に棒が打ち込まれた。

デレクは絶叫したが、他の二人のように空中に跳ね上がりはしなかった。そのかわり、思い切り背中をのけぞらせ、いまにも頭から床に落ちそうになった。

部屋にいた全員が、期待に満ちた目でデレクを見ていた。なかでもリッキキーはとくに、倒れると祈るような目つきだった。

もし、デレクが倒れなかったら、彼はもう一度（おそらくはもつと効果的な方法で）鞆丸を痛めつけられることになるのだ。そして、これ以上耐えられる自信はなかった。

デレクは爪先立ちで立っていた。上体がさらに背後にかしいだ。

だが、次の瞬間、彼は起き上がり、腫でしっかりと立った。

みな、息を失い、部屋じゅうを沈黙が支配した。

沈黙を破ったのは、リッキキーの号泣だった。

ブリトニーは彼の前に立った。

「惜しかったね」

彼女は、リッキキーを慰めるように言った。心の底から、彼のために残念がっているように聞こえた。

だが、次の瞬間、彼女は数歩後ろにさがり、それから勢いよく助走をつけてリッキキーめがけて突進した。

足が撥ね上げられた。

恐ろしい音をたてて、爪先が彼の鞆丸に打ち込まれた。

リッキキーはもはや悲鳴をあげる力もなかった。

彼は白眼を剥き、静かに床にくずおれた。

「勝利者が決定しましたあ!!!」

ブリトニーは、大きく両手を広げて叫んだ。

女性たちが、いつせいに拍手し、口笛を吹き、口々に叫びながら足を踏みならした。

「デ・レ・ク！ デ・レ・ク！ デ・レ・ク！」

ブリトニーはデレクに並んで立ち、彼のペニスをつかみ、チャンピオンを祝福するレフェリーのように、大きく掲げた。

デレクの表情は、安堵のあまり、今にも泣きだしそうだった。

11 氷の女王

「こいつら、邪魔」

ブリトニーが、去勢されて床に横たわるテックスとダリウスを、顎でしゃくった。もはや興味はない、と言わんばかりの態度だった。

三人の女性ダンサーたちは、すぐに立ち上がり、二人の体を部屋の隅に引きずっていった。生きているのか死んでいるのか、ぴくりとも動かない。それから三人は、勝利者であるデレクを立ち上げらせ、椅子に座らせた。山羊髭の黒人デレクは、いまだ恐怖と苦痛に苛まれ、がくがくと震えながら座った。

ブリトニーは、木製の椅子と小さな低い木のストウールを、膝まずいですすり泣く二人の敗者——プエルトリコ出身のカルロスと、ブロンドのリッキーの前に置いた。そして、自分は椅子に腰をおろし、きれいな脚を組んだ。

ポーラが、白い布に覆われたトレイを運んできて、ブリトニーのすぐ近くのテーブルの端に置いた。デビッドの眼には、ブリトニーはとても退屈そうに見えた。もうこのゲームには飽きた様子だった。とはいえ、すぐに終わらせるふうでもなかった。

ポーラがトレイの布をとった。トレイには、幾つかの小さなストラップや留め金、そして、さまざまな長さの大きなアイスピックが何本か置いてあった。さらにテーブルには、木製のハンドルのついた長いワイヤ、さらにさまざまな長さのコードが置かれた。

ブリトニーは、それらの道具を拾い上げ、これから二人に与える恐ろしい責め苦を仄めかすように、嘲けり笑いを浮かべて、いじくりまわしていた。それから、二人のダンサーの間に膝をつき、トレイを床に置いた。ポーラとタラが、それぞれ一人ずつ、ダンサーの背後に立ち、後ろから彼らの頭と喉をつかんだ。キキは、ブリトニーに向かい合うかたちで、ダンサーたちの間に膝をついた。

ブリトニーは、ストウールをカルロスの股間の真下に置き、座らせた。ストウールは、膝をついたカルロスがちょうど尻を置けるように高さが調整されていた。

「コードを」

手術中の外科医のように両手の甲を見せながら、彼女は命じた。キキはすばやくコードを女人に手渡した。ブリトニーは、それをカルロスの膨張した陰囊の根元に結び付け、もうひとつの端をストウールに固定した。

「ストラップを」

赤毛のキキは、命じられるままに、ストラップをブリトニーに手渡す。レーザーのストラップは15センチほどの長さで、中央に留め金がついていた。彼女は、リッキークの生殖器の根元にストラップを巻き付け、両端を留め金に通し、ぎゅつと絞った。留め金とレーザーのストラップが、リッキークの生殖器に食い込むほど、きつく縛ったのだ。

リッキークは苦痛のうめき声をあげたが、ブリトニーはかまうふうもなく、ストラップの輪の直径が、リッキークのペニスの直径の半分になるまで締めつけた。2〜3センチほどの間隔をおいて、亀頭の直前まで、数本のストラップで締めつけた。それから立ち上がり、仕上げを確認し、満足そうに頷いた。

「猿ぐつわを」

ブリトニーの指示に、忠実なメイドたちは手際よく、二人の口に赤いボールを押し込み、皮のベルトで固定した。

「さてと……」

ブリトニーは冷やかな眼で、恐怖に震える二人のダンサーを見比べながら言った。

「嘆願も懇願も無駄よ。そんなものはじゅうぶん聞き飽きた。さっさと終わらせることにするわ」

それから、掌を上に向けて突き出し、

「アイスピックを」

と命じた。長い金属製のアイスピックが彼女の小さな掌に置かれた。柄の部分を掴むと、彼女は鋭く尖った先端を見つめた。アイスピックは全体で20センチほどもあり、13センチほどの錐がついていた。

彼女はそれを振り上げ、ふりおろした。

アイスピックの先端がカルロスのペニスを串刺しにし、木製のストウールに突き立った。

おそろしい絶叫が、猿ぐつわを打ち破る勢いで発せられた。

だが、ブリトニーは、地獄の業火に悶えて激し



く痙攣するカルロスを眺めて楽しむことはしなかった。彼女はすばやく、次の作業にとりかかっていた。明らかに、彼女はゲームに飽きていた。早く終わらせたがっているようだった。

彼女は、金属製のワイヤを、リッキキーの亀頭近くに巻かれたストラップのすぐそばに巻き付けた。

「いくわよ」

ブリトニーが声をかけたが、リッキキーはもはや観念したように眼をつむっていた。どんなに懇願したところで聞き入れてくれないことは分かっている。同じ目にあうのなら、せめて一刻でも早く早く終わらせたい、彼はそう願っていたのだろう。

ブリトニーは、ワイヤーの両端についた木製のハンドルを両手でつかむと、思い切り引つ張った。金属製のワイヤーがリッキキーのペニスに食い込み、亀頭を鮮やかに切断した。切り離された肉片が床に落ち、血が噴き出した。つづいて、ものすごい悲鳴が、猿ぐつわの背後から迸った。

ブリトニーは、無表情に作業をつづけた。もう一本のアイスピックをカルロスのペニスの、最初に突き立てたアイスピックから2〜3センチ離れた箇所には打ち込んだ。それからもう一度、リッキキーのペニスをワイヤに巻き付け、また2〜3センチぶんを切り落とした。

その作業が15分にわたって続けられた。リッキキーの股間には、もはや何も残ってはいなかった。輪切りにされたペニスの残骸が、床に転がっているばかりだった。

一方、カルロスのペニスには、数本のアイスピックが突き刺さり、木製のストウールに縫い付けられていた。もはや、なんの役にも立たなくなったことは、明らかだった。

「もう、じゅうぶんね」

ブリトニーは、満足げに頷いた。

「さて、ほんとうに最後の仕上げにかかわるわよ」

彼女はそう言いながら、残った二本のアイスピックを取り上げ、一本を右手で握りしめた。そして、その先端を、カルロスの左の睾丸に突き刺した。

カルロスにはもはや悲鳴をあげる力も残っていなかった。彼の上半身がゆっくりと後ろに倒れ、後頭部が床に落ちた。股間の生殖器がアイスピックでストウールに縫い付けられていたので、ブリッジをしているような恰好になった。ブリトニーは、残る一本を右の睾丸に突き刺した。

カルロスの生殖機能は、完璧に破壊された。

彼女はつづけて、リッキキーの最後に残された生殖器、陰囊の中央部分にワイヤを巻き付けた。陰囊はあっという間に真つ二つに切断された。切り口から大量の血が噴き出し、つづいて四つの肉塊がこぼれおちた。

リッキキーの睾丸は、ワイヤによって、真つ二つに割られていたのだ。

リッキキーの全身は、無言で床にくずおれた。

「やったわ！」

ブリトニーは、興奮を取り戻したように叫び、睾丸の片割れをひろいあげた。

「さつきテックスの陰囊の中身を見たばかりだけど、今度は睾丸の内側を見られたわ」

彼女は、それをキキに放り投げた。キキは反射的に両手でそれを受け取り、血にまみれた醜悪な睾丸の残骸に顔をしかめ、「うっ」と呻いて、床に放り投げた。

12 そして誰もいなくなった

二人の敗者の「処理」を終えると、ブリトニーはベッドの端に腰をおろし、三人の女性ダンサーたちとお喋りをはじめた。まるで女子高生が男の子を話題にしているような賑やかさだった。

もつとも、会話の内容は、異常なものだった。

「おちんちん切られたときの、あいつの顔見た？」

「見た、見た。すごかったよねえ」

「私、いちばん興奮したのは、タマタマにアイスピックをつきたてられて、ガタガタって震え出したとき」

「うん、あれもよかったよね」

「でも、やめてくださーいって泣きながらお願いしてたのもよかったと思わない？ あの必死な

様子がたまらないんだよね」

お喋りが数分つづいた後、ブリトニーはベッドの上で思い切り腕を伸ばした。明らかに疲労の色が見えたが、表情はとても満足そうだった。タラがバスルームに駆け込み、ヘアブラシを持って戻ってきた。ブリトニーの背後に膝まずき、汗にまみれた髪の毛を梳かしはじめた。

キキはグラスにシャンパンを注ぎ、女主人に捧げた。彼女はグラスを受け取り、一気に飲み干した。三人の女ダンサーたちは、クレオパトラに仕える女奴隷のように、マッサージをしたり、髪の毛を整えたり、汗をぬぐったりと、恭しく奉仕した。

「おいで、デレク」

名前を呼ばれた黒人ダンサーは、はっと顔をあげた。ブリトニーは、高圧的な南部訛りで、もう一度命じた。

「早く！」

デレクは飛び上がり、彼女の前にまろびながら近寄った。

彼女の眼は、大柄な黒人の鋼のような肉体を、嘗めるように上から下まで追っていた。疲れを見せて輝きをなくしていたその表情に、残忍な愉悦が浮かびあがっていた。

「キャシー、次のステージまでに、何人男性ダンサーを用意できる？」

マネージャーのキャシーは、ファイルを広げて確認してから明快に答えた。

「少なくとも六人は用意できます。一日あれば」

「じゃあ、金曜日のステージには、デレクはいなくても別にいいってわけね」

ブリトニーの言葉に、デレクはびくっと身を震わせた。

「ええ、必要ありません」

キャシーは救いようのない事務的な口調で答えた。

ブリトニーは、女ダンサーたちになにごとかを囁きかけた。三人は、身軽にベッドから飛び下りた。

ブリトニー自身は、ベッドの端に腰かけたまま、脚をぶらぶらさせながら言った。

「考えたんだけど、デレクのパフォーマンスには以前のキレがなくなったのよね。そう思わない？」

言いおわるなり、キキとタラが、デレクの目の前に膝まずき、ポーラが彼の肘をつかんで後ろ手にねじあげた。キキが彼の陰囊を、タラが彼の亀頭をコードで縛った。二人がそれぞれのコードの片端を持って立ち上がった。

ブリトニーは、部屋の隅の大きな金庫に歩み寄り、扉を開いて、その中から黒く細長い布袋を取り出した。袋の中には90センチほどの長い筒のようなものが入っているようだった。

彼女はそれを手に提げて、不安を募らせるデレクに近寄った。

ブリトニーがデレクの目の前で立ち止まると同時に、キキとタラがコードをきつく引つ張った。デレクのペニスと陰囊が、長く延びた。デレクの体は、165センチの彼よりも10センチばかり長身のポーラに取り押さえられ、微動だにしない。

「これ、東京にツアーに行ったとき、手に入れたものなの」

彼女はそう言いながら、布袋を払った。黒光りする鞘に入った日本刀が出てきた。

「日本の国王からじきじきに賜ったのよ。なんでも相当古い時代につくられたビンテージものらしいわ。そうね、一九七〇年代くらいだと思うけど」



最後の言葉に、デビッドは噴き出しそうになった。ブリトニー・スピアースは、この地球という星でもっとも無知蒙昧な人種の一人らしい。だが、彼女がざらりと光る刀身を抜きはなったとき、思わず身が凍んだ。

鍛え抜かれた刃は、そこ知れぬ威圧感を醸しだしていた。彼女が刀を構えてデレクの傍らに立ったとき、彼は恐怖のあまり涙を流したがたがた震えはじめた。彼女の視線は、コー

「ブリトニーが、ダンサー全員に来るよう、言っています」

デビッドがキャシーと二人で、最高級ホテルの最上階のペントハウスに滞在するブリトニーの部屋に赴くために、エレベーターに乗り込んだとき、デビッドの背筋に寒いものが走った。

「以前にもこんな場面があったな……」

そう。八ヶ月前。あのときはニューヨークだったけど。

キャシーは、エレベーターのドアを見つめたまま、表情を動かさない。デビッドは、落ち着かず、身体がもぞもぞと勝手に動いた。

最上階に着いた。二人はエレベーターを出て、ブリトニーの部屋に向かった。ドアを開けると、ブリトニーは電話に向かって何かしゃべっていた。デビッドの姿を見ると、穏やかな笑みをセクシーな顔に浮かべ、明るく手を振り、中に入るよう促した。

彼女は、空色のシースルーのネグリジェを、まとっていた。その下は、Gストリングのパンティだけ。豊かな乳房も、かわいらしいおへそも丸見えだった。つま先を出した黒いハイヒールのサンダル。首にゴールドのチェーンがまかれ、大粒のダイヤが豊かな胸丘の谷間に垂れている。

デビッドのペニスに、堅く膨張しはじめた。あの夜以来、彼はブリトニーの姿を見るだけで(さほど露出度の高いコスチュームでなくとも)勃起してしまうのだった。

受話器を置くと、ブリトニーはデビッドとキャシーに歩み寄り、明るく小首を傾げて挨拶した。

「ご用ですか？」

と訊ねるキャシーに、ブリトニーはノンシヤランとした軽い口調で言い、隣室——ベッドルームになっていた——に行くよう、二人を促した。

「なんでもないわ。スタッフを何人か入れ替えたいだけよ」

ベッドルームに入ると、L字型のソファに、十人近い男女が座っていた。女性ダンサーが見知らぬ三人の若い男を取り囲むようにしていた。

ブリトニーは、三人の男を紹介した。デビッドの耳には彼らの名前は入ってこなかった。彼の脳裏には、「スタッフを入れ替える」という先ほどの彼女の台詞だけが反響していた。彼の下腹部に鈍い痛みがこみあげ、広がってきた。

「あの、ミス・ブリトニー」

デビッドは思わず訊ねた。

「誰と誰が、入れ替わるんです？」



ブリトニーはきびすを返してデビッドと向き合い、彼の背後を指さした。振り返ると、そこには、両手を縛られ天井からつり下げられ、猿ぐつわをはめられた二人の男がいた。チャドとミゲル。デビッドの同僚だ。全裸で、ペニスを勃起させている。見上げると、天井からはもう一本、誰かをつり下げるための鎖が用意されている。

六人の女性ダンサーがいつせいに立ち上がり、デビッドに近寄ってきた。

「さあ、デビッド」

ブリトニーがこやかに言った。

「あなたの最近のパフォーマンスには幾つかの問題点があったわ。だから次のステージでは、この三人と入れ替わってもらうことにしたの。抵抗しても無駄よ。痛い目にあうだけということに分かってるわね」

たちまちデビッドは六人の女性ダンサーに取り囲まれ、あっという間に着衣を全てはぎ取られた。

デビッドの涙の哀願も、一瞥もされなかった。一分とたたぬうちに、彼は他の二人と並んで天井からつるされた。

猿ぐつわをはめられた三人は、ブリトニーが笑いながら「ルール」を説明するのを、恐怖に包まれながら見つめていた。

数時間後。

デビッドの視界は真っ暗になり、意識は混濁し、消失寸前だった。

彼が最後に見たものは、ブリトニーの愛らしい笑顔、彼の睾丸にまとわりつく細い指、彼のペニスに吸い付く官能的な唇だった。彼の「男性性」の全てを破壊しようとする世紀の歌姫の。